

国を越えた親切

東京都 学習院女子中等科 3年 飛田 弥優

私は今年の8月上旬に、オーストラリアに行った。あるオーケストラに入って、オーストラリアで開催されるコンサートに出るためだった。しかし、そのオーケストラのメンバー全員が台湾の人たちだった。私はとても不安で、残りの5日間、このメンバーと打ち解けられないのではないか、とっていた。

その日の夜、同じ部屋の人に英語であいさつを試してみた。けれど、首をかしげて、「この人は何を言っているんだろう」という顔をしていた。私の部屋は4人部屋で、私を除けばもちろん全員が台湾人。3人で楽しそうに、私のわからない言葉で話しているのを見ると、私はだんだん自分が邪魔なのではないかと思いはじめた。

すると、ある一人が小さな紙に『入浴』と書いて、ふろ場を指さしながら私に見せてきた。私はそれだけで、何が言いたいかなんとなくわかった。おそらく、「お風呂、先にどうぞ」と言っていたのだと思う。そして、私が唯一知っている「謝謝」という言葉だけ言って、ふろ場に行った。

それからというもの、コンサート、また、コンサートの練習など、みんなと話す機会が増えるにつれて、だんだん打ち解けられるようになった。みんなも、私と打ち解けられるように必死に英語を練習してくれていて、私はとてもうれしかった。日本にいて宿泊行事などでみんなと打ち解けると、また少し違った喜びだった。

そんな毎日が続き、ある日、ファイナルコンサートの最後のリハーサルのときだった。突然、目の前に座っているヴァイオリンの男の子が倒れた。それは一瞬のできごとで、何が起こったかわからなかったが、オーケストラのメンバーのお母さんたちが、焦って男の子を助けようとしているのを見て、やっと状況がわかった。しかし、みんなは何も見えていなかったかのように、再び練習を始めていた。私には信じられなかったが、まわりに合わせて練習を始めた。

(私はあのとき、どうして助けることができなかつたんだろう……。) そう思って、とても後悔した。そしてその後悔の心に耐えきれず、男の子の元に行った。男の子はソファの上で寝ていて、そのまわりをいろいろな人が取り囲んでいたが、その人たちの男の子への視線は冷たく、まわりの人はすぐに去っていった。私は心配してその場に残った。メンバーの数名といっしょに。

すると、メンバーの一人が私に、「やさしいね」と言ってきた。でも、私の先ほどの行動を思い返すと、それは「やさしい」とは到底言いづらかった。だから私はそのとき、苦笑いしかできなかった。

そして、とうとう最終日。みんなにいろいろなプレゼントをもらったが、中でも一番うれしかったのは、メンバー全員の寄せ書きだった。その中には、前の倒れた男の子からのものもあった。そこには、『謝謝』と書いてあった。私はそれしか読むことができなかつたが、訳もわからず涙が出てきた。

みんなの寄せ書きは、これからも私の心の支えになるだろう。